れるときの両親の胸中を考えるとき、戦後の人には全く想像できないことだろう。昭和二十三年に復員されてからの経歴の概要は、

1　北海道川上郡弟子屈町にて土木事業、製糖工場に勤務し、さらに将来は自営業を目指したが、長男であるために親元に呼び戻された。

2　出生地にて地元の大東銀行に二十年間勤務した後、脱サラを図り茶舗を開き自営業を開業したが、大東銀行の元の上司に嘱望されて、同社の子会社として発足した大東商事の保険業務に勤務した。

3　大東商事に勤務、約三年の後、退社し、安田火災海上保険株式会社の代理店として大室損害保険事務所設立、その間に上級の資格試験に合格、現在に及んでいる。

氏の信条は、自己の職場を通して世のため人のために誠意を尽くすこと。この結果、いったん契約をいただいた顧客には、長く継続して取引をいただき、顧客がさらに顧客を紹介して下さって、より広い範囲の新規の契約ができている。

現在の心境は、「ソ連に抑留された当時の労苦を思えば、どんな苦痛にも耐えられる。あの苦しみは神の与えて下さった試練であったと感謝している」とのことである。日本の高度成長期以後は豊かになり過ぎて、物質にのみ走り精神面を忘却している、自分のみ生きられれば良いというのでなく、相互扶助の精神を高揚しなければならないと言われる。

開業以来、優良事業所として優秀な成績をあげられ、整えられた顧客網と共に繁栄を続けている。そのため、世間一般では後継者難に陥っている事業が多い中で、次男元秀さんが事業を継承すべく研鑽を積んでいる。

（福島県　熊田　正雄）

シベリア回顧録

千葉県　伊藤千次

昭和二十年八月の初め、中国漢口第十五航空通信連

隊第六中隊所属漢口合同通信所より朝鮮安州飛行場に転属を命ぜられ、藤井分隊十人、南京経由列車にて八月九日満州撫順、ソ連機爆撃下をかいくぐり、十日朝、朝鮮新義州に到着。五日間で敗戦、以下中隊長の指揮下に入った。

昭和二十年八月十日朝、新義州駅に到着、さっそく中隊本部になっている新義州小学校で友村中隊長に帰隊の申告をした。小学校の前に鴨江日報という豆新聞社があり、九日ソ連が参戦したというニュースが入ってきた。そういえば昨晩撫順製鉄所付近を通過中、バンバンと火花を散らしていた。製鉄所は勇壮だなあと話しながら通って来たが、あれは製鉄所が爆撃されていたのだ。アンテナを引っ込めた通信隊が何も知らずに走って来たが、よく列車が爆撃されなかった。安州飛行場へ転出のため機材を点検整備する。

八月十五日、天皇陛下の玉音放送があるので正午講堂に集められた。ラジオの玉音を聞いたが雑音がひどく良く分からなかった。日本が戦争に負けて連合軍に無条件降伏したのだということだった。

日本が負けた、これからどうなるのか。歌の文句ではないが「東洋平和のためならば何で命が惜しかろう」と、天皇陛下のため日本国のためと勇躍内地を出征してから長きは五、六年兵、万感胸にせまるものがあった。

そのうちに鴨緑江の鉄橋を渡って線路伝いに関東軍の兵隊が三々五々逃げて来るようになり、町に出るとソ連軍が来るという噂で、床屋では若い娘が母親が付き添って泣きながら髪を切って男のようになっていた。召集令状と軍刀を握って入隊すべきかと初年兵に相談する将校がいた。

毎日午後一時になると中隊長が兵隊を講堂に集め「戦争に負けたのではない、天皇陛下が和を請うたのである。皆で内地へ帰り復員式を行うのだ」と来る日も来る日も同じ話を聞かされ、兵隊はあきあきした。鴨緑江の上流で治安が悪くなり、日本人保護のため、藤井分隊が補助憲兵となり派遣されたが、私は出発日軍装を整えているとき、ガタガタとふるえ出し、マラリア病が発生し参加できなかった。人事係の准尉に

「なぜ今日熱を出すんだ」としかられた。分隊員たちはホヤホヤの憲兵となり、山の中なので非常な歓待を受け楽しい十日間だったようだ。

移動中兵站で給与を受けるとき、他の部隊にはくれない酒・甘味品を飛行兵には支給された。日曜日の夕食には必ず酒が出た。中隊長と同年兵の生越上等兵などは酔うと「友、友」と追いかけるようになり、たまには軍刀を抜いてあばれた。そのせいか酒は出なくなった。

昼夜鴨緑江を渡って南下する兵隊が多くなった。もちろん列車は満員で南下していった。毎日の精神訓話にもかかわらず兵隊たちは動揺し出した。中隊長は皆を集め全員内地復員説凍結、「南朝に下りたい人は申し出るように」と話された。古兵たちはトラックに米、ガソリンを積んで宿屋の女中さんを連れて南朝へ下った組が何組かあった。

冷静に考えれば中隊そろって内地に近い方に逃げるべきだったが、中隊長は動こうとしなかった。命令がきて全兵器（通信機材）の菊のご紋章をけずって校庭に積み上げた。通信隊には懐中時計も兵器である。惜しいような気もしたが命令なのであきらめた。

八月二十三日、三十八度線ができ、北側をソ連、南側をアメリカが占領することになった。

平壌三合里練兵場に八月三十日午後十二時までに集合せよとソ連軍から命令が来た。弾丸はなかったが防寒具など被服は沢山あったので、家への土産と皆持てるだけ持って出発した。

新義州駅から貨車で平壌駅へ、平壌駅から三合里まで約十キロメートルを徒歩で歩いた。すべての部隊が三合里へと、歩兵は私たちのように歩き、自動車隊はトラックに荷物を満載し、輜重隊も馬車に荷物を満載。誰も丸腰、帯剣は付けていない。これが半月前までは最強を誇った帝国陸軍かと黙々と歩いた。夕方になってきたので中隊は夕食をとることにした。藤井分隊は私たち初年兵が民家に入り釜を借り夕飯を炊いていた。夕闇迫るころ航空軍の将校が馬を飛ばして「今晩十二時までに三合里に入らなければ銃殺する」とどなってまわった。飯炊きにも伝令が来た。大急ぎで飯盒に飯

を詰め三本ずつ組んで六本持ち帰る。街道はごったがえしている。馬車、自動車、人人人、三合里へ三合里へと皆夢中で歩いた。背中の荷物がぶつかり合って歩けない。御影供養のような人ごみである。それも暗闇の中、とうとう背中の荷物（両親の写真、郵便局の通帳、現金など全財産）を道路脇に捨ててしまった。自分の私物は捨てても分隊の食事二六本の飯盒を大事に持ってひたすら歩いた。ようやく三合里練兵場の入口にたどり着いた。

電気がこうこうと点いていた。猿のような顔をしたソ連兵が日本兵を十人ずつ横に並べ、煙草（さくら）を一本ずつくれて中に入れていた。日本兵が怖いので煙草をくれるのか、数学ができないので煙草一箱終われば六百人だと考えたのか、とにかく三万人近く集まった。薄明かりの所へ藤井分隊全員集まって来た。皆腹ペコであった。飯盒を見るとただ一言「ご苦労様」と言われた。副食が何もなかった。近くにどこの部隊が持ってきたのか缶詰がごろごろしていた。新義州を出る時切れ物一切持ってはならないという命令だったので針一本持っていない。缶切りにはナイフが付いていたので捨ててきた。車の角とか鋭角をさがしてなんとか缶詰を開け、夕食をすませた。

夜中にのどの乾きをおぼえ古井戸の水を飲んだ。朝見ると泥水の井戸だった。高台から昨夜来た道を見ると、自動車は止まり馬が倒れており、毛布、被服、糧秣、釜、事務機器が散乱していた。朝鮮人が泥棒している。そのうちに各中隊より使役を出すよう命令がきた。数回トラックで物資の収集に出る。出る時はランニングシャツ一枚で、下着、軍服、外套、小物と何枚も着込み昨日失った全財産以上の物を集めた。靴下などは一カ月間洗濯なしの使い捨てにした。

舎営司令官は航空軍の中佐殿、道路の清掃が終わると大隊の編成をした。一中隊二百四十人、四個中隊と指揮班四十人、合計千人。一大隊から七大隊までは航空軍、三十人隊には警官、役人もいた。私たちは七大隊越智大尉、三中隊友村中尉、一分隊藤井伍長。捕虜の生活が始まった。

三合里練兵場は周りが小高い山に囲まれた小さな盆

地で、中に馬小屋がたくさん建っていた。馬小屋にテントで仕切りを作り、地面に毛布を敷いての生活が始まる。周りや衛門にはソ連兵の歩哨がいるが、捕虜という実感が湧いてこない。三食たべて他に何も用がないので内地へ帰るデマに花を咲かせていた。

中隊に二、三の鉈と斧が渡され食事用の薪集めに使えと支給された。初めは馬小屋の周りの松の木を切り、灌木まで根こそぎ取り、周りの鉄条網までまたたくうちに取り上がり赤土が見えるようになり、練兵場には燃えるものがなくなった。三万人分の炊事の薪である。根まで掘って燃やした。次は歩哨が二人ついて練兵場外へ薪を取りに出るようになった。一カ月もたつと一里も先へ行かなければ薪が取れなくなる。歩哨の目をかすめて朝鮮人が物を売りに来るようになった。先日街道で拾った軍の煙草（さくら六百本入り）や饅頭や瓜など、初めは金があったが、だんだんとなくなってくる。大勢で売り子に同時にかけ合って品物を取り、金を払ったり払わなかったり、わからなくなる。歩哨に言うわけにいかず「アイゴー、アイゴー」とぼやいて帰っていった。

皆退屈していた。野球を始めた部隊もある。霜が降りる頃、一大隊が軍装（私物）して内地へ帰る予定で出発して行った。皆ニュースを聞いて集まり羨望の目で見送った。数日して二大隊も出て行った。しばらくして七大隊の番となった。数人のソ連歩哨にまもられ二カ月前に来た道を逆に平壌へ。感無量であった。歩哨との付き合いが始まる。「東京ダモイ（帰る）、東京ダモイ」と連発する。少し遅れると「ダワイ（急げ）、ダワイ」、もたもたしていると「スカレ（早く）、スカレ」、言うことを聞かないと「ヨッポイボハマチ（畜生）」など、大隊千人、後方中隊はいつも「ダワイ、ダワイ」である。

沿道にはまだ馬の死骸があり、自動車が横倒しになっていた。半日ほどして平壌駅に着いた。駅構内には女の民間人がたくさんいた。かつての帝国陸軍はどこへやら、民間人にふかし芋をめぐんでもらった兵隊もいた。貨車に乗せられたがなかなか出発しない。夜になって発車したが、月明かりに北上しているようだ。釜山

は南だが、しばらくして東に向かった。着いた所は日本海側の興南の港であった。

興南には日本チッソの会社があり、その従業員宿舎に入れられた。中央に大きな池があり、その周りに四階建ての宿舎がならんでいる。部屋の間取りは六畳に押入れが上下二段、ここに一分隊が割り当てられ一カ月暮らすことになった。押入れには四人、畳に十一人と大塚小隊長。夜中トイレから帰ると自分の寝る所がなくなっているが、人と人との上にむりに割り込んで寝た。

ソ連軍は朝鮮のあらゆる物資（工場の機械類・材料、倉庫の食料・物品）を貨車や船でシベリアへ持ち去った。駅と波止場の使役に駆り出された。先発の一大隊から六大隊はここにはいなかった。内地へ帰る船待ちの一時ぐらいに考えていた。

興南へ来てから分隊ごとの炊事を中隊ごとにすることになり炊事班が編成され、柳川軍曹が班長となり、初年兵でよく働くやつと私が選ばれた。朝早く起きて二百五十人分の食事を作ることになる。ここで天神山村の渡辺正己さんに会う。彼は桂林作戦（中国奥地）から帰って来た由、水牛の角のパイプを磨いて親父の土産にするんだと楽しんでいた。飯野村の須藤正雄さんもいたが曹長さんで、えらい人だったため、あまり話もしなかった。

待ちに待った乗船の命令がきた。渡辺さんは昔の大学出だったので、いろいろの知識があったのだろう、「きっとソ連に連れて行かれるだろう、私は乗船しない」と、腹痛下痢の仮病をつかい乗船しなかった。皆勇んで乗船した。昭和二十年八月二十六日朝鮮興南を出発した。

船は貨物船で、朝鮮ソ連国境地方から歩いて来た二十四大隊と他の大隊と三千人が乗っていた。二、三時間たっても左側から陸地が離れない。日本海へ出れば陸地が見えないはず、北九州に行っても陸地は右のはず、おかしいなと思っているうちに船はウラジオストックに入港、岸壁に横付けした。渡辺さんの勘が当たったのか、上陸を覚悟した。なかなか上陸の命令が出ない。甲板に大釜を据え船の蒸気で飯を炊くことになっ

た。太いホースを中に入れボコボコ、またたくまにできあがった。

使役が出て物資が運びこまれた。担架、薬、包帯、肉や食糧をたくさん積み込む。日本にソ連の兵隊が行っているのでその食糧などを運ぶのだろうと勝手に想像していた。船の上でわびしい正月を過ごし、昭和二十一年一月七日憧れの出港をした。また左側から陸地が離れない。コンコンさんを占う人がいて「冬は日本海が荒れているので大陸棚を通り津軽海峡から南下し船は横浜に入る」、こんなデマが瞬時に船中をかけめぐった。

内地へ帰るのだからと病気を無理してつれて来た有線の某軍曹が死亡し、初めて水葬に立ち会った。時間的には津軽海峡に着くはずなのに夕日を左に見て北上した。そのうちに山に雪が見えてきた。右側にも陸地が見えてきた。船は薄氷を割って進み、間宮海峡を北上していた。朝、船が止まっている。皆甲板に駆け上がった。船の回りは氷でびっしり、陸地も真っ白。ジープが降ろされ氷の上を走っていった。歩哨が氷の上で焚き火を始めた。皆驚いた。こんな情景は初めてであった。

抑留されるんだという実感が湧いてきた。昨日まで歩哨は「東京ダモイ」「東京ダモイ」と連発していた。日本に帰れない。死、父や母は、親類、山や川、いろいろなことが走馬灯のように頭を駆けめぐった。下船命令が下る。興南では乗船が早かったが下船はのろのろである。「ダワイ、ダワイ」が始まった。一月十七日は入ソ記念日。

氷の上を湾に向かってしばらく歩いた。前を船が横切り、氷が割れて三十分ほど渡れないなど、驚くことばかりであった。途中で大隊、中隊が別れて各所に向かった。私たちの中隊は陸にあがってすぐ公民館のような家に一泊した。翌朝五百メートル先の第三収容所に入った。高い板塀を巡らし、二隅に望楼があり歩哨が見張っている。朝晩の点呼にはこりこりした雪の上に整列させられて三十分、何度数えても合わない。炊事、病室、トイレを自分で回って数える。何度数えてもだめ、ソ連兵は九九ができなかった。隊長が列外に

いては数えられない。

半月程して六十人、歩哨が二人ついて出発したが、行く先は分からない。やがて川に下り氷の上を上流に向かって進んだ。両側は密林であった。雪の上で昼食をとり、また進む。どこへ行くのか心配であった。

やがて夕方となり月が出てきた。前の人も、まわりの木々も見えない闇である。歩くことができなかった。前の人と縄で結びへっぴり腰でついて行った。「ダワイ、ダワイ」の追い討ちがかかってもなかなか前へ進まない。軍隊がなくなってから栄養がアンバランスになったためか、ビタミンAが不足すると鳥目になるという話は知っていたが、自分がなってしまった。昼間は何ともないが、夜、太陽光線がなくなると何も見えなくなった。

ようやくたどりついた所はチパリ収容所。周りに高い鉄条網を巡らし、二カ所に高い望楼があり四六時中歩哨が立哨していた。その中に事務所、炊事場、風呂場の一棟と丸太小屋（丸太を横に積み上げた家）が二棟、広さは三間の十間、床は二段板でなく丸太がならべてある。中央に箱形のストーブが一個、電気はない。たどりついたが真っ暗闇で私には何も見えない、戦友に助けられて丸太の上に毛布を敷き枕元に装具を置き眠った。朝、暗闇で身支度ができるように心配してくれた。

朝六時、レールを切って吊り下げた鉦の音で起こされる。飯上げも分配も戦友がしてくれた。「ハイ朝飯、ハイ昼食のパン」と手渡してくれた。山に着く頃には夜が明け、すべて見えてきた。作業は伐採、二人一組で大木をピラー（二人引きノコギリ）で切り、六メートルと四メートルに玉切りし、一カ所に集めて積み上げ、枝葉を燃やしてきれいにする。積み上げた山を毎日測るがノルマはなかなか達成できない。昨日の分を積み換えてごまかすこともあった。ソ連兵が気づいて片口に墨をぬるようになった。すこし切って燃やし、また積み換えるが、それでもノルマは達成できない。段々と慣れて、ピラーの日立て、丸太の動かし方、枝葉は幹から打ち落として燃やす。仕事ができるようになるとソ連兵はノルマを増やしたので、きりがなかっ

た。

木が倒れるときお互いに声をかけ合って倒したが、運悪く枝が刺さって重傷を負った戦友がいた。軍医は川の水に食塩を入れてリンゲルのように注射したが何ごともなく元気になった。

春先になり雪が解け出すと、切った木を馬で引き滑らせて再び谷川に落とし、氷の上に積み上げた。川の水が解け出すと丸太が流れ出す。川の狭い所で丸太が引っかかり次々とからみ合い流れを止めてしまう。トビ口を持って丸太をチョンチョンと渡り、引っかかりを引きはずし大急ぎで岸に逃げ帰る。命がけである。川を行き来して丸太の面倒をみる。

興南から船の上も炊事係をやっていたので食事の取り過ぎか、上陸してからずうっと慢性の下痢に悩まされていた。薬がないので炭などをかじっていた。大阪の畝本上等兵が私の話を聞き、三十人程病弱者を町の収容所へ降ろす仲間に入れてくれた。来るときは川の氷の上を上ってきたが、帰りは峠を越え山道を下った。雪が解けて良く晴れ上がった湯気の立つ道を、ぬかるみだが山から解放された喜びで病弱者ながら足どりも軽かった。

雪解けのどろどろ道を二、三の低い山を越えその日のうちに第五収容所に着いた。ここは一番大きな収容所で、昔囚人を四、五千人収容していた所とか。望楼から望楼まで約二百メートル、大きな兵舎のような棟が十も建っている。やはり二段ベッド。ここでは丸太でなく板張りである。衛門の隣の一棟が病室になっており、そこに落ち着いた。

私達が最初に上陸した所は一山向こうの谷間の平地で第三収容所、どちらもソフガワニ湾に面しており、ソフガワニ川をさかのぼった所がチパリ収容所である。

気候は五月、一カ月余りも何もせずに遊ばせてもらったので、薬は何もなくてもだんだんと元気になってきた。ずっと鳥目に悩んでいたがアメリカの肝油はよく効いた。毎日一粒ずつ三日飲んだら夜眼が見えるようになった。夜中眼がさめてトイレに起きようとして土間を見るとサンダルが見える、柱が見える、隣の戦友の布団が見える。庭の離れたトイレまで行くことがで

きた。半年間夜は目が見えなかったので、こんな嬉しいことはない。

こんなにいい肝油も病室者でなければもらえないので、私は何日も何日も「まだ見えない、まだ見えない」といって薬をもらい内務班の戦友に分けてやった。（群馬県の沼田という戦友がいたが、今はどうしているだろう。）そのうちに内務班は帰され黒田班に入った。

昭和二十一年六月一日、黒田班長以下十五人は山小屋で薪取りを命ぜられ、トラックで十キロメートル程離れた山奥に着任した。山野は芽吹いていたが橋の下にはまだ氷があった。先の第一次大戦のとき日本軍がシベリア出兵し焼き払った山野が何十キロと続くその中に立ち枯れの大木が延々と続く。眼をさえぎるような木は育っていない。その立ち木を切り、二メートルに玉切りして積んで置き、下からトラックが来ると横に積んで返す。それが仕事であった。歩哨が一人、昼間はリスなど撃っており、夜は下の農園から娘が遊びに来、山小屋は一部屋だが泊まって朝帰りする。ノルマはなく間に合えばよいのでのんきだった。幾山も貯金ができマリーナ（山苺）を取ったり松の実を取ったり、ムジナの巣を見つけていぶして捕ったりして食べ体力をつけた。

私は炊事係を仰せつかり、かまどを造り大木を切り、根本で動かない臼を造って籾を搗き白米をつくり、マッチがないのでかまどの火を四六時中絶やさないで十六人の食事を作った。食糧は下から来るトラックが十日ごとに持ってくるが、一回だけ遅れたことがある。私の心がまえで毎日少しずつ節約して一、二日分の食糧は蓄えてあった。ソ連では「働かざる者食うべからず」だから「食べなければ働かなくてもよい」。計算上明日の食事がないことになる。真夜中に食事を作り、食べて眠り朝となる。歩哨に「クシャイニエット、ラボーターニエット、オデハイ、スパーチ（食べないから、仕事しない、休みで寝る）」、歩哨はそれでよいと言った。一日遊び山苺など採っていて、町から採りに来たソ連人と会いパンなどと交換した運のよい戦友もいた。

ソ連人は草は馬が食うものと昆布は食べない。樺太

からシベリアへ持ち込んだとろろ昆布が大量にあり配給を受けた。炊事にも困り各人に分配した。なんとその量が多く、皆大きな袋に入れて枕にしていた。山では火が自由に使えるので飯盒一杯に煮たとろろ昆布を食べて寝る。夜中に唇が痺れ体中が痺れ死ぬかと思った。気持ちの悪い不安な一日だった。昆布にはヨードの成分があることは知っていたが恐ろしい事だった。夕方には快方に向かい皆一安心した。

班員には阿部という変わった兵長がいた。シベリアには大きな色々の茸がある。内地のものに似ているが、どれが食べられ、どれが毒茸か分からない。彼は片端から食べて毒味した。三十センチメートルもある初茸、大きな松茸にもお目にかかった。彼は山苺を摘んですり潰し、水筒に入れ日当たりのよい所に置いて酒も作った。

あるとき将校の一団が通りかかった。竈の周りに鮭の骨や尻尾が捨ててあった。それを拾って竈の火で焼きうまそうに食べていた。かつての帝国陸軍の将校も負けて捕虜になれば同じ人間、食事も洗濯も自分でやらなければならない。しかし将校は労働はしなかったらしい。

誰かの煙草の火の不始末か山火事を起こしたことがあった。夢中で薪の山を蹴散らし火をたたいて消したが、二山燃えてしまった。町の収容所で煙が見えたのかソ連の将校が馬で飛ばしてきて「ヨッポイボハマチ」の連発、銃殺されるかなと心配になった。夜二人ずつ寝ずの番についた。地面は土でなく大木がくさって折り重なっている。そこに昼間の火が残っており風が吹くと螢火のようにあちこちで光る。それを足で踏みつぶす。一晩中総がかりで消火にあたった。ソ連では火災を起こせば国家の財産を失ったので重罪である。しかし何のおとがめもなかった。

山の薪切りも任務が終わり町の収容所に帰ってきた。船での炊事班長柳川軍曹が待っていた。「炊事班に来ないか」と誘われた。多い時は千人もおり、五右衛門風呂の四、五倍もある大釜、水を入れ米とか燕麦とか雑穀とかその日によって違うがカマスのまま中に入れ、エンピでかき回しゴミをすくい火をいれる。雑である。

水はたっぷり入れ火を点ける。沸騰してからしばらくことこと煮る。九時頃には明日の朝食ができ上がる。蓋をして朝までゆっくり蒸らす。人肌ぐらいの温度に保ち糊状になっている。体のためのお粥か胃袋を満足させるためか、とにかく量を増やして分配する。昼食は黒パン、夕食は糊とスープ、塩湯にきゅうりとかキャベツ、塩鮭とか小魚、たまには豪勢にタラバガニのときもある。一抱えもあるようなタラバガニを鉈でぶつぶつ切りスープに放り込む。でき上がると味見をし殻は釜に戻しておく。

糧秣受領は炊事の係と歩哨と各中隊からの使役で行った。倉庫の係は倉庫の物を取ると怒るが計量してトラックに積んだ物を取ってもとがめない。ついて行った歩哨はトラックに積んだ物を取ると怒るが倉庫の物を取ることはむしろ勧めて仲間に入ることもあった。使役は各中隊ともベテランが選ばれる。大きな魚のときは小魚、米のときは麦とか大豆または缶詰とか、トラックの中ではっきり受領品と違う物を倉庫の係のスキを見てかっ払う。取る物を決めて歩哨が倉庫係の気をそらすこともあり、帰って来て山分けした。

糧秣受領で見つかった兵隊があり、衛門横の重営倉に入れられた。寒い時期だったので鉄格子の中でペーチカが焚かれ罪人はぬくぬく、外で歩哨に立った日本人ががたがたふるえていた。おかしな話だが、衛門所の歩哨も暖を取らないので重営倉の歩哨も仕方なかった。

だんだんと日が経つにつれ人心も安定し、捕虜になったあきらめ、生き延びて内地へ帰るのだという希望、いっとはなしに民主運動などが起こり反ファシスト委員会などもでき、中隊長や作業長は選挙で選ぶようになった。階級章もなくなり、作業により移動が多かったので上下の関係が少なくなった。

『日本新聞』なるものが週三回火木土と配布された。真偽のほどは分からないが、皆活字に飢えているのでむさぼるように回し読みをした。日本の内閣のこと、世界の国々の出来事、ソ同盟のこと、皆共産主義的な解説で帝国主義の誹謗であった。でも東京極東裁判とか片山内閣の成立を知った。ナホトカから病院船で病

人を帰したとか、日本が輸送船をよこさないからお前たちは帰れないなど。最後には新聞は皆に等分に分けられマホルカ（煙草）の巻き紙となった。

軍隊にはあらゆる職業の人がいて、芸能人もたくさんいた。日曜日の午後各中隊対抗の演芸会を行うようになり、劇団が組織され、麻袋で着物を作り馬の尻尾でカツラを作った。チャンバラはダメとのお達し。湯島の白梅とか唐人お吉など、一時捕虜であることを忘れさせてくれた。劇団員は作業をしながら夜練習をしたので大変だったろう。やがてソ連の指導か日本人の共産主義者の考えか、民主劇をやるようになった。

シベリアの秋は短いから農作物は短期間に収穫しなければならなかった。九月中頃チパリ川の中流域の農場にじゃがいも掘りに三十人派遣された。畑は大きく一枚が四、五町歩もあり、馬に鋤を引かせてじゃがいもを掘り返して行く。その後から柳の枝で作ったカルジンカという篭に拾い集めていく。集めたじゃがいもは細い木で米選機式の大型の選別機を作り、上からころがして小粒を取り除く。最後にトラックで倉庫へ運ぶ。初めのうちは一生懸命働いたがだんだんと疲れてくる。中央でカルジンカ一杯のじゃがいもが、畑の端の集積地まで百メートル、二十キロが三十キロに重くなる。誰始めるともなくじゃがいもを拾うではなく歩哨の眼をかすめて埋めることを覚えた。これも体力を保つための悲しい知恵であった。

畑と畑の間に木が生えており枯れ木もたくさんあった。畑の端で焚き火をし、カルジンカ二、三杯のじゃがいもを放りこみ、焼けた頃かわるがわる取りに行き火傷をするような熱いいもをポケットに山盛りに詰め込み、仕事をしながらいもを食べていた。農場にいる間は空腹ではなく満腹をへらすために働いていた。ある日作業から帰って来ると収容所の中がごった返していた。ソ連兵が私物検査をしていた。畑からじゃがいもを盗んで来たと取り上げ、庭に袋に入れて積み上げている。中に入れてくれないで、庭では火を焚き盗んで来たじゃがいもを茹でて気勢を上げて食べている。中で盗品を摘発し外では新しい盗品を食べている。間抜けなソ連兵である。五、六袋のいもを取り上げて帰っ

ていった。九月に入ってソ連兵がいやに仕事を急がせると思っていたら、シベリアの冬は早い。一晩の霜でいもの茎が真っ黒になってしまった。

畑の端の大きな倉庫もじゃがいもでいっぱいになった。この倉庫の真ん中に大きなストーブがあり、じゃがいもを凍らせないために春まで昼夜火を焚き続ける。その仕事は婦人がしていた。薪は原野から自分で集めて燃やしているようだったが、雪が降ったら応援を頼むのだろう。

雪の降る前にじゃがいもを土産に第五収容所に帰って来た。

収容所から四、五百メートル離れた海岸べりに二六三工場があった。船の修理をする工場で、大型船が何隻も泊まっていた。潜水艦がいたこともある。朝七時、昼食の黒パンを持って集合。五列縦隊の一番前に並ばなければだめである。なぜなら、歩きながら捨てられたタバコを拾うからである。工場門が開くと一斉に目的地へ飛んで行った。(船はゴミや残飯は陸上に捨てるので大きなパン、肉、鮭の頭や骨、朝飯の残飯があったのである。下士官も兵隊も皆餓鬼のようであった。捨て場は何か所かあるので、各人の勘で昨日あった、昨日よかったと駆けだしたくなる)

二六三工場へは旋盤工とか研削工とか特技を持った人が二百人程通っていた。私も仕上工として登録してあったので、いも掘りから帰るとすぐ組み込まれた。ロシアの職人はあまり腕がよいように思われなかった。日立のモーターを指さして「ヤポンにもこんなモーターがあるのか」と自慢していた。「日本にはモーターはないが太陽が二つあるのでロシアのように寒くなく、暖かい」と言うと感心していた。

その日によって色々の仕事をした。大きな船の船倉のパイプを取り替える仕事があり、ソ連兵の女の溶接工の手伝いをすることになった。彼女は独ソ戦に参加した勇士だったらしい。なぜか私を可愛がってくれた。朝工場に行くと「イト、イト」と私を連れ、もう一人は誰でも酸素ボンベを二人で担がせて船倉に下り、一人は帰してしまう。広い船倉で二人で毎日仕事をした。一週間ぐらい続いた。日本の家族の話、彼女の話、い

ろいろの話、言葉の通じないのは手振り身振りで何とかなった。煙草もずいぶん吸わせてもらった。収容所生活のうちで思い出深い仕事の一つである。

黒パンは唾をまぜながら指で練っていると餅のようになってくる。針金で釣針を作り、その黒パンを餌に波止場に流し針をかけておく。仕事の合間に見に行くと大きなアンコウがかかっている。次からアンコウの内臓を餌にして釣る。船のカンカン虫のときはブランコの上で釣りをしながら仕事をしていた。大きなアンコウは戦友にも分け飯盒で炊いて食べた。春になると雑草を入れ塩味をつけ何よりのご馳走だった。

驚いたことにはソ連兵には女の船員がいる。日本でも最近女性自衛官ができ船乗りができたが、当時としては驚きだった。また甲板に豚を飼っている船もあった。日本人にしては驚きだった。

抑留生活二年目の秋、真新しい服が支給されて残務整理班を残して船に乗せられた。二年間のいろいろな思い出を残してソフガワニを後にした。東京ダモイと何回だまされたことか。今度は本当だろう、皆晴れ晴れとして船旅を続けた。右側に陸地を見て南下すること一週間でナホトカ港に入った。海岸にはたくさんのテントが見える。なかなか上陸できず、今年は時間切れらしいなど噂が流れた。それが本当となった。出港して南下し、ウラジオストック港に入り上陸させられた。

着いた所はウラジオストックの隣の第二の川という駅の傍の町中の収容所だった。私たち二百人程で、他の主力は途中でどこか別れて行った。毎日小さな雑作業に出されていたが、だんだんと作業が決まってきた。民主運動が盛んになり、ハバロフスクからオルグが来るようになり反ファシスト委員会ができていろいろな活動を始めた。夜強制ではないが勉強会が開かれるようになり、共産主義の教育が始まり、天皇制、資本主義からソ同盟、スターリン礼賛、共産主義的解説である。出ないと睨まれるのでほとんどの人が出席した。

委員会にいろいろな部ができ、私は青年部長に選ばれた。作業場へ向かうトラックの上で赤旗の歌や作業歌を音頭をとって歌わせたり、読書会などを主催した

り適当にふるまっていた。

石山という作業場があった。石山の中腹に穴を掘り貯水池にするらしく、そこの仕事に毎日通い出し、やがて定着した。岩山でなく石山である。ツルハシやバールでは掘れるわけがない。でもノルマはきつく、水増しの作業量報告でも五〇パーセントに満たなかった。その頃スタハノフ運動が起こり、毎日各班ごとの作業量を報告し衛門前の掲示板に貼りだされた。ハラショーラボーターは百パーセント以上で上位に掲げられる。石山班は最下位ブロホラボーターである。衛門前の朝の整列がいやな毎日が続いた。貯水池の隣に鉄筋のビルが建ち、左官の募集が出た。私は左官の手伝い程度なら経験がある。毎日ブロホ、ブロホと言われているよりはと左官を志願し、五人で伊藤組を作った。

砂とセメントと水を練る役、運搬する役、木コテで塗る役、水加減が非常に難しいが少しやれば慣れた。平面は何とかペタペタと塗ることができるようになった。石山ではブロホラボーターが左官ではハラショーラボーターとなり、掲示板に二百パーセントと掲示され食料も増配されたが、一カ月程で終わった。その頃ヨーロッパの方から発疹チフスがはやり、シラミが媒体するとかで皆裸にされバリカンで毛を剃られた。

三回目の雪が降ってきた。ある日五十人程で市内道路の雪掻きに行き、その帰り道、後ろから少佐の乗ったジープが来た。道は自動車一台分しか道幅がない。日本の捕虜を道の両側にどけろと言っている。後ろの歩哨が銃の安全装置を外して少佐のジープに銃を向け、通るなら通ってみろという構えをした。少佐はどうすることもできなかった。ソ連は任務に対しては上官も何もない。私たちはわざとのろのろと交差点まで歩き続けた。また、少尉が隊長で二百人ほどで貨車に乗り隣り町へ雪掻きに行った。仕事は半日でノルマは終わったが、夕方にならなければ列車は来ない。湾の氷の上を横切れば早く着く。湾を一直線にウラジオストックの方に向かった。着いた所が油タンクの基地だった。民間人が警備している鉄条網を潜って基地を横切った。途端に民間人が銃を空に向け二、三発発射した。少尉と人喧嘩である。でも通ってしまった。明朝、隊長少

尉さんは兵隊に格下げになっていた。

昭和二十三年五月頃、皆既日食を見た記憶がある。仕事は順調だったがダモイの噂が流れ、特技を持っている者は残されると付録がついていた。左官になって失敗したかなと思っていた。

よく働く人たちが十人、二十人とどこかへ出て行った。後で分かったことだが皆衣部隊に席を置いた人たちだった。先に内地に帰っていったと思っていたがそうではなかった。噂が本当になり私たちがナホトカに行くことになった。書いた物や検査に引っかかる刃物など皆捨てた。日本の引揚船に乗るまでは安心できない。途中から反動分子は奥地に返されたなどという噂が流れていた。

ウラジオストック駅まで歩き、貨車でナホトカへ向かった。ナホトカにはたくさんのテントが張ってあり、反ファシスト委員会本部にはコチコチの共産主義者がおり、日本を目前にしてつるし上げあり、シベリア奥地へ送り返される人があり、噂は本当だった。青年部長とはいえニセ者である、内心は心配しつつも胸を張っていた。夢にまで見た日本の船が沖合いに姿を見せた。

浜辺に整列、一人一人名前を呼ばれて桟橋のほうへ歩いて行く。走りたい気持ちである。船は戦時標準船の山澄丸であった。ボーと汽笛を鳴らして港を出る。ソ連兵が追いかけて来やしないかという気持ちにかられる。日本海の公海に出てやっと帰れるなという実感が湧いてきた。船の食事は日本食が出たろうが何も覚えていない。昭和二十三年六月一日の午後四時頃、暑い日差しを浴びて船は静かに舞鶴港に滑るように入っていく。桟橋にのぼりを立てた大勢の人人人人、その前のほうに白衣を着た大勢の看護婦さんが日の丸を振っている。皆、上甲板の左舷に集まって船が傾きそうだ。皆おいおいと泣いている。後から後から涙が出てくる。日本を出て四年目の感激である。DDTの消毒から衣服の受領、ソ連の調査、死没者の報告、帰還手続きなどで一週間かかった。トイレに入り掃除をしていた小母さんに「ここの水飲めますか」と聞いて笑われたが、まだシベリアにいる気持ちかと苦笑した。

【執筆者の紹介】

千葉県富津市近藤一三一

大正十三年四月二十四日生

昭和十九年八月一日　中部第一三〇部隊入隊（浜松）

昭和十九年八月二十日　中支派遣軍第四航空通信連隊に転属

昭和二十年四月　中支派遣軍第十五航空通信連隊第六中隊に転属、漢口合同通信所勤務

昭和二十年七月　北朝鮮安州飛行場に転属

昭和二十年八月十五日　終戦

昭和二十年八月三十日　平壌に集合、三万人

昭和二十年十二月二十六日　朝鮮興南港出発

昭和二十一年一月十七日　シベリア、ソフガワニ港に上陸

伐採、農作業、工場勤務等に従事

昭和二十二年十一月　ウラジオストック港に上陸

大工、左官、雑役等に従事

昭和二十三年六月　ナホトカ港より乗船、舞鶴港に帰還

昭和二十三年七月一日より　株式会社黒田狭範大貫工場に勤務

昭和五十三年三月　株式会社黒田精工富津工場を退社

昭和五十三年四月　君津市都市公社に勤務

昭和五十四年十二月　同社退社

富津交通安全協会車庫調査員として勤務

平成九年九月三十日　同協会退職

全国強制抑留者協会（千葉県）が設立と同時に県連副会長、地元支部長を歴任、現在に至る。

（千葉県　城市　義雄）